

# 『アンティゴネー』三つのオード

平野智晴

## I はじめに

ソフォクレス『アンティゴネー』第三スタシモン（以下、S. *Ant.* 3<sup>rd</sup> St.）において、テーバイの長老からなるコロスが 791-794 σὺ (i.e. Ἔρως) καὶ δικαίων ἀδίκους | φρένας παρασπᾶς ἐπὶ λῶβᾱ· | <sup>アゴーン</sup>σὺ καὶ τόδε νέικος ἀνδρῶν | ξύναιμον ἔχεις τaráξας\*1 と歌ってクレオーンとハイモーンの激しい論争を明確に振り返って見せたとき、この悲劇の破滅的な結末がどのようなものになるのであれ、それをもたらし直接的な力がともかくも <sup>エロース</sup>愛であるらしい、ということが当時の観衆／読者には感得されたはずである。果たして、悲劇の進行に従って、二人に <sup>エロース</sup>愛の破壊的な嵐が吹き荒れるのを、彼らは目の当たりにするのである。むろん、愛するアンティゴネーの亡骸を前にして半狂乱になったハイモーンが後を追って命を絶つ姿は、壮絶なものである（1219-1243）。しかし、激しい衝撃を受け惨めにも破滅したのは、むしろ、息子と妻を一度に失ったクレオーンの方であった、というべきであろう（1261-1269, 1284-1293）\*2。

これと同様に、第一スタシモン（以下、1<sup>st</sup> St.）における「<sup>カコン</sup>禍いに歩み寄り亡国の民へと転落する恐るべき人間」（370-371）について、まずは、クレオーンの布告に抗ったアンティゴネーを指し示しているように見えるが（449-470）、その実（、知らずして）、神の法に抗ったクレオーンを指し示していた（473-496）、という解釈\*3を、そして、第二スタシモン（以下、2<sup>nd</sup> St.）における「<sup>トロペルバシアー</sup>僭越に陥ったがゆえにゼウスによって迷妄／<sup>ア</sup>破滅を被ろうとしている人間」（604-605, 622-624）について、まずは、アンティゴネーの運命を予覚しているように見えるが（853-856, 872-875）、その実（、知らずして）、クレオーンの運命を予覚していた（1261-1269, 1284-1293）、という解釈\*4を、それぞれ受け容れることにする。このとき、三つのオードとの関わりから仮定される本劇全体の物語の骨格は、およそ、次のようなものとなるであろう。すなわち、「あらゆる智慧の達成の極みに

\*1 ソフォクレスのテキストは、見解の分かれている読みも含めて、Lloyd-Jones and Wilson, *Sophocles Fabulae* に拠る。

\*2 Winnington-Ingram 92-98.

\*3 Sano 40-43.

\*4 Cairns 19-26.

あつて権力をほしいままにしているクレオーンが（1<sup>st</sup> St.）、<sup>ヒュプリス</sup>傲慢に陥って神の法を蔑ろにしたために、ゼウスの怒りを買ひ<sup>アーテー</sup>迷妄に取り憑かれ（2<sup>nd</sup> St.）、——ついには、<sup>エロース</sup>愛による<sup>アーテー</sup>破滅を被ることになる（3<sup>rd</sup> St.）。

<sup>ヒュプリス</sup>傲慢に陥った果てに<sup>アーテー</sup>迷妄に取り憑かれて<sup>アーテー</sup>破滅を被ることになる、という物語はそれなりに理解できるものである\*5。しかし、それが、<sup>エロース</sup>愛によって引き起こされる、ということについては、いささか奇異な印象が拭えない\*6。コロスが<sup>ヒュプリス</sup>傲慢に陥ったことを（知らずして）非難している対象がクレオーンであるとして、何故、クレオーンは、<sup>エロース</sup>愛による<sup>アーテー</sup>破滅を被らなければならなかったのであろうか。

実は、<sup>ヒュプリス</sup>傲慢、<sup>エロース</sup>愛、<sup>アーテー</sup>破滅の組み合わせは、他の悲劇作品においても繰り返し現れることが知られている。

例えば、アイスキュロス『供養する女たち』第一スタシモン（以下、A. Cho. 1<sup>st</sup> St.）冒頭のニスタンザである。これは、Ant. 1<sup>st</sup> St. との、とりわけ冒頭における類似性が指摘されてきたが（S. Ant. 332 πολλὰ τὰ δεινὰ ... と A. Cho. 585–586 πολλὰ μὲν γὰρ τρέφει | δεινὰ δειμάτων ἄχῃ ...）\*7、引き続き、人間の大胆に過ぎる<sup>フロネーマ</sup>傲慢（594–595）と、女を狂わす<sup>アペロトス・エロース</sup>愛ならぬ<sup>エロース</sup>愛（599–602）\*8 が現れ、その<sup>エロース</sup>愛は人間の<sup>アーテー</sup>破滅を伴うのである（597–598）\*9：

πολλὰ μὲν γὰρ τρέφει 585  
 δεινὰ δειμάτων ἄχῃ,  
 πόντιαί τ' ἀγκάλαι κνωδάλων  
 ἀνταίων βροτοῖσι πλή-  
 θουσι· βλάπτουσι καὶ πεδαίχμιοι  
 λαμπάδες πεδάοροι 590  
 πτανὰ τε καὶ πεδοβάμονα· κἀνεμόεντ' ἄν  
 αἰγίδων φράσαι κότον.

ἀλλ' ὑπέρτολμον ἄν-

\*5 Cairns 19–27.

\*6 3<sup>rd</sup> St. については、しばしば、この悲劇の中心的主題とは関わりが無いものとされてきた。例えば、Burton は、ソフォクレスが強調する狂気と破壊へと導く愛の力について 603 (2<sup>nd</sup> St.) λόγου τ' ἄνοια καὶ φρενῶν Ἐρινύς を思い起こさせる、とまで論じていながら、この悲劇の主題との関わりは限定的である、と結論付けている (Burton 117–118)。

\*7 Jebb 70 ad v. 332, Cairns 7–8.

\*8 Garvie は、597–598 (παντόλμους) ἔρωτας について、性的情熱が含意されていることを認めた上で、それでもさらに広い意味での情熱を考える。cf. A. Sept. 688, A. Ag. 1478, S. Ant. 617 etc. ἔρωτος の破壊的な力について、cf. A. Ag. 341, 743, 1478, S. Ant. 781 ff. (3<sup>rd</sup> St.), E. Hipp. 525 ff., 1268 ff. etc. (Garvie 207 ad vv. 596–7). また、600 ἀπέρωτος ἔρωτος について、cf. Garvie 208 ad vv. 599–602.

\*9 アイスキュロスのテキストは、見解の分かれている読みも含めて、Page に拠る。

δρὸς φρόνημα τίς λέγοι 595  
καὶ γυναικῶν φρεσὶν τλημόνων  
παντόλμους ἔρωτας, ἅ-  
ταισι ( ) συννόμους βροτῶν;  
ξυζύγους δ' ὀμανλίας  
θηλυκρατῆς ἀπέρωτος ἔρως παρανικᾷ 600  
κνωδάλων τε καὶ βροτῶν.  
 (A. Cho. 585–602)

他の例には、アイスキュロス『テーバイ攻めの七将』(以下、A. Sept.) 720–791 行のオード中盤の二スタンザがある。この、「オイディプースが家筋の根を血塗れにした」という表現については、Ant. 2<sup>nd</sup> St. の「最後の根……を、地下の神々の血塗れの刃が刈り取る」という表現に影響を与えた可能性が指摘されてきたが<sup>3</sup> (A. Sept. 753–755 ὅστε ματρὸς ἀγνὰν | σπείρας ἄρουραν ἔν' ἐτράφη | ρίζαν αἱματοέσσαν | ἔτλα と S. Ant. 599–602 νῦν γὰρ ἐσχάτας ὑπὲρ | ρίζας ἐτέτατο φάος ἐν Οἰδίπου δόμοις· | κατ' αὐτὴν νιν φοινία | θεῶν τῶν νερτέρων ἀμῶ κοπίς)\*<sup>10</sup>、ここでも、<sup>ヒュベルバシアー</sup>僭越行為 (743–749, cf. S. Ant. 605 ὑπερβασία) と、<sup>ファイレー・アプーリアー</sup>愛しさ故の無分別 (750)\*<sup>11</sup> と、<sup>モロス・ハウトローイ</sup>自らの死の運命 (751) とが、一続きとなって現れるのである：

παλαιγενῇ γὰρ λέγω  
 παρβασίαν ὠκύποινον, αἰῶνα δ' ἐς τρίτον  
 μένειν, Ἀπόλλωνος εὖτε Λάιος 745  
 βίαι τρις εἰπόντος ἐν  
 μεσομφάλοις Πυθικοῖς  
 χρηστηρίοις θνάσκοντα γέν-  
 νας ἄτερ σώϊζειν πόλιν,  
  
κρατηθεῖς ἐκ φιλᾶν ἀβουλιᾶν 750  
ἐγείνατο μὲν μόρον αὐτῷ,  
πατροκτόνον Οἰδιπόδαν, ὅστε ματρὸς ἀγνὰν  
σπείρας ἄρουραν ἔν' ἐτράφη  
ρίζαν αἱματοέσσαν 755  
ἔτλα· παράνοια συνᾶγε  
νυμφίους φρενώλης.

(A. Sept. 743–757)

\*10 Cairns 17–19.

\*11 750 κρατηθεῖς ἐκ φιλᾶν ἀβουλιᾶν という意味深長な表現について、Sommerstein は、性欲が仄めかされていることはもちろんであるが<sup>3</sup> (cf. E. Phoen. 21–22 ὁ (i.e. Λάιος) δ' ἡδονῇ ἵνδους ἔς τε βακχεῖαν πεσών | ἔσπειρεν ἡμῖν (i.e. Ἰοκάστη) παῖδα)、むしろここでは子孫を持つことの欲望が意味されている、と論じている (Sommerstein 230–231 n. 109. cf. Hutchinson 167 ad v. 750)。

すなわち、傲慢に陥ったのがクレオンだったから、愛による破滅を被ったのではない。クレオンもアガメムノーンもラーイオスも、彼らは、傲慢に陥ると、等し並みに迷妄に捕らえられ、愛による破滅を被ることになったのである。

見通しを明確にするために議論の一部を先取りしたが、本論は、*S. Ant.* 三つのオードに展開され悲劇の物語に反映されるこの傲慢—愛—破滅の過程について、その文学的な伝統を考察するものである。

## 2 *S. Ant.* 三つのオードの比較

*S. Ant.* 三つのオードは、それぞれのオードが先行作品と個別に有している、いわば作品間のテキスト関係<sup>\*12</sup>の他に、後続するオードが先行するオードを継承・変奏する、いわば作品内のテキスト関係をも有している。後者のオード間の関係のうち、1<sup>st</sup> St. と 2<sup>nd</sup> St. については度々論じられてきた<sup>\*13</sup>が、1<sup>st</sup> St. と 3<sup>rd</sup> St. については詳細に検討されてはこなかった<sup>\*14</sup>。そこで、本論では、1<sup>st</sup> St. と 3<sup>rd</sup> St. の、そして、2<sup>nd</sup> St. と 3<sup>rd</sup> St. の詳細な比較を行い<sup>\*15</sup>、これらを全て踏まえて、三つのオードの相互関係について総合的に考察する。

<sup>\*12</sup> 1<sup>st</sup> St. は、*A. Cho.* 1<sup>st</sup> St. 585–601 や *Sol.* 13 W 43–62 の他、前 5 世紀中～末期にかけて現れた、技術を数え上げ文明の発展を描いた一群のテキストと比較されうる。とりわけ、「プロメテウス神話」と関わる *A. PV* 442–503, *Pl. Prt.* 321 c–322 d, *E. Supp.* 201–218 との類似性が高く、ソフォクレースは、自らのオードを書くにあたって、*A. Cho.* 1<sup>st</sup> St. 585–601 と *Sol.* 13 W 43–62 と共にこれらをも念頭に置いた、と考えられる (Sano 33–36)。2<sup>nd</sup> St. については、様々な文学的資源が論じられている。すなわち、ラプダコス家代々に及ぶ禍いの描写 (594–603) において *A. Sept.* 720–765 に、また、海からはじまる嵐に比較されるゼウスの怒りの描写 (586–593) において *Sol.* 13 W 17–25, *A. Sept.* 758–765 に、迷妄／破滅の性質の描写 (615–625) において *A. Cho.* 1<sup>st</sup> St. 595–598, *Sol.* 13 W 63–70 等に、富から生ずる迷妄／破滅の描写 (613–614) において *Sol.* 13 W 11–13, 71–76 等に、それぞれ負っているのである (Cairns 16–19)。3<sup>rd</sup> St. は、賛歌の伝統的な形式に基づいて作られており、他の有名な *Epws* の賛歌である *E. Hipp.* 525–564、そして、*Epws* の第二賛歌である *E. Hipp.* 1268 ff. としばしば比較される (Burton 113)。その他、不死なる神々も逃れられない、という描写 (787–790) において *h. Ven.* 34–37 に、偉大なる法の傍らにあって支配している、という描写 (797–799) において *Pi. fr.* 169a 1–4 に、また、富を襲い正しき者の心をも不正にねじ曲げる、という描写 (791–792, 782) において *Sol.* 4 W 12–14, *Thgn.* 44–46 等に、それぞれ負っている可能性がある。

<sup>\*13</sup> Easterling 150, Cairns 10–13.

<sup>\*14</sup> 最初にこのことを指摘したのは、恐らく Steiner であった (Steiner 257)。しかし、3<sup>rd</sup> St. は、一般的に、4<sup>th</sup> St., 5<sup>th</sup> St. とともに神々の世界に呼びかけ彼らの世界を活写していると考えられ (Kitzinger 21 n. 18)、人間の限界を人間の視点から描いている 1<sup>st</sup> St., 2<sup>nd</sup> St. とは独立したものとして扱われている。

<sup>\*15</sup> 本論の紙幅を考慮し、1<sup>st</sup> St. と 2<sup>nd</sup> St. の比較については、ここで繰り返すことはせず、先行研究に譲ることとする。cf. Cairns 10–13.

2.1 1<sup>st</sup> St. と 3<sup>rd</sup> St. の比較

1<sup>st</sup> St. と 3<sup>rd</sup> St. を具体的に比較すると、以下の通りとなる：

πολλὰ τὰ δεινὰ κούδ' ἐν-  
θρώπου δεινότερον πέλει·

τοῦτο καὶ πολιοῦ πέραν  
πόντου χειμερίῳ νότῳ (335)  
χωρεῖ, περιβρυχίοισιν  
περῶν ὑπ' οἴδμασιν, θεῶν  
τε τὰν ὑπερτάταν, Γᾶν  
ἄφθιτον, ἀκαμάταν ἀποτρύεται,  
ἰλλομένων ἀρότρων ἔτος εἰς ἔτος, (340)  
ἵππεύῃ γένει πολεῦων. (332-341)

Ἔρως ἀνίκατε μάχαν,  
Ἔρως, ὃς ἐν κτήμασι πίπτεις,  
ὃς ἐν μαλακαῖς παρειαῖς  
νεάνιδος ἐννυχεύεις  
φοιτᾷς δ' ὑπερπόντιος ἐν τ' (785)

ἀγρονόμοις αὐλαῖς·

καί σ' οὐτ' ἀθανάτων φύξιμος οὐδεὶς  
οὐθ' ἀμερίων σέ γ' ἀν-  
θρώπων, ὃ δ' ἔχων μέμνηεν. (781-790)

1<sup>st</sup> St. において、人間より恐ろしいものはない (332-333)、とされるが、3<sup>rd</sup> St. において、<sup>エロース</sup>愛こそ戦いにおいて打ち負かすことができない (781)、とされる。1<sup>st</sup> St. において、人間は海を越え大地を痛めつける (335-341)、とされるが、3<sup>rd</sup> St. において、<sup>エロース</sup>愛は海を越え大地を訪れる (785-786)、とされる。<sup>エロース</sup>愛は<sup>クテーマ</sup>財産に襲いかかり\*16 乙女の頬に宿るのであるから (782-784)、これが海を越え大地を訪れる、と描写されるとき、まずは、海を越え大地を痛めつける人間を捕らえる、ということが意味されている、と考えるべきである\*17。実際、不死なる神々も死すべき人間もこの<sup>エロース</sup>愛を逃れることができず (787-790)、これを得た者は心が狂う (790)、とされる。

\*16 κτήμα は字義通り「富」と解釈すべきであり、Jebb の解釈と類例は適切であると思われる。cf. Jebb 145 ad v. 782, Lloyd-Jones and Wilson, *Sophoclea* 135-136 ad v. 782 (以下、Lloyd-Jones & Wilson)。また、愛、迷妄／破滅、富（の毀損）が一続きに現れる他の例として、cf. A. *Sept.* 766-791。すなわち、オイディプースは、自らの呪われた愛に気付いたとき (778-780)、苦しみのあまり正気を失い迷妄／破滅に捕らわれ目を潰し (780-784)、富を争って子らが殺し合いをするであろう、という呪いの言葉を放ったのであった (785-791)。cf. n. 21.

\*17 3<sup>rd</sup> St. において、愛が影響を及ぼす対象は、第一義的には「不死なる神々」(787)と「生が日々に限られた人間」(789-790)とすべきである。むしろ、その描写は意図的に曖昧にされており、動物も含めた「生きとし生けるもの」と解釈する余地は残されている。cf. A. *Cho.* 599-602 ξυζύγουσ δ' ὀμαυλίας | θηλυκρατῆς ἀπέρωτος ἔρως παρανικαῖ | κνωδάλων τε καὶ βροτῶν.

νόμους παρείρων<sup>18</sup> χθονὸς  
 θεῶν τ' ἔνορκον δίκαν  
 ὑψίπολις· ἄπολις ὅτω τὸ μὴ καλὸν (370)  
 ξύνεστι τόλμας χάριν.  
 μήτ' ἐμοὶ παρέστιος  
 γένοιτο μήτ' ἴσον φρονῶν  
 ὅς τὰδ' ἔρδοι. (368–375)

σὺ καὶ δικαίων ἀδίκους  
 φρένας παρασπᾶς ἐπὶ λάβᾳ·  
 σὺ καὶ τόδε νεῖκος ἀνδρῶν  
 ξύναμιμον ἔχεις ταραξᾶς· (791–794)

1<sup>st</sup> St. において、国の法と神々に誓った正義を貫く者は高邁な民となり (368–370)、不埒にも悪しきことに手を染める者は亡国の民となり (370–371)、こうした者が自分たちと竈を共にし心を同じくすることがないように (372–375)、と祈願されるが、3<sup>rd</sup> St. において、愛<sup>エロース</sup>は正しき者の心をも不正にねじ曲げ (791–792)、この血の繋がった男たち (すなわち、クレオンとハイモーン) の諍いを引き起こした (793–794)、とされる。彼らが諍いを起こせば、国の統治は危うくなり、亡国の民ともなり得るであろう。

νόμους παρείρων χθονὸς  
 θεῶν τ' ἔνορκον δίκαν  
 ὑψίπολις· ἄπολις ὅτω τὸ μὴ καλὸν (370)  
 ξύνεστι τόλμας χάριν.  
 μήτ' ἐμοὶ παρέστιος  
 γένοιτο μήτ' ἴσον φρονῶν  
 ὅς τὰδ' ἔρδοι. (368–375)

νικᾷ δ' ἐναργῆς βλεφάρων (795)  
 ἥμερος εὐλέκτρον  
 νύμφας, τῶν μεγάλων πάρεδρος  
 ἐν ἀρχαῖς<sup>19</sup>  
 θεσμῶν· (795–799)

1<sup>st</sup> St. において、国の法と神々に誓った正義を貫く者は高邁な民となり (368–370)、不埒にも悪しきことに手を染める者は亡国の民となり (370–371)、こうした者が自分たちと竈を共にし心を同じくすることがないように (372–375)、と祈願されるが、3<sup>rd</sup> St. において、勝利を取めるのは閨の悦びを約束する花嫁の瞳に宿る欲望<sup>ヒメロス</sup>であり (795–797)、これが偉大なる法の傍にあって支配している、とされる (797–799)。

## 2.2 2<sup>nd</sup> St. と 3<sup>rd</sup> St. の比較

2<sup>nd</sup> St. と 3<sup>rd</sup> St. を具体的に比較すると、以下の通りとなる：

εὐδαίμονες οἷσι κακῶν ἄγευστος αἰών.  
 οἷς γὰρ ἂν σεισθῇ θεόθεν δόμος, ἄτας

Ἔρως ἀνίκατε μάχαν,  
 Ἔρως, ... (781–782)

\*18 368 παρείρων の読みが疑われていることについて、cf. Jebb 76–77 ad v. 368, Griffith 189 ad vv. 368–71. しかしながら、cf. Lloyd-Jones & Wilson 124 ad v. 368.

\*19 797 πάρεδρος ἐν ἀρχαῖς の読みが疑われていることについて、cf. Jebb 147–148 ad v. 797, Griffith 260 ad vv. 797–9. しかしながら、cf. Lloyd-Jones & Wilson 136 ad v. 797.

οὐδὲν ἐλλείπει γενεᾶς ἐπὶ πλῆθος ἔρπον· (583-585)

ἄμαχος γὰρ ἐμ-  
παίζει θεὸς Ἀφροδίτα. (799-800)

まず、2<sup>nd</sup> St. においては、不幸を味わうことなく人生を全うする者は幸せである (583)、と始まり (、そのような幸せな人間などいない)、神によって家を揺さぶられる者には、何代にもわたってあらゆる破壊が襲ってくる (584-585)、と続くことで、神が人間を打ち負かす様子が描かれる。これに対して、3<sup>rd</sup> St. においては、<sup>エロース</sup>愛は戦いにおいて打ち負かすことができない (781)、と始まり、<sup>アフロディテー</sup>愛は打ち負かすことができない存在として戯れている (799-800)、と終わることで、<sup>エロース</sup>愛が不死なる神をも死すべき人間をも打ち負かす様子が描かれる (cf. 787-790)。

ὥστε ποντίας ἁλὸς  
οἶδμα δυσπνόοις ὅταν  
Θρήσσησιν ἔρεβος ὕφαλον ἐπιδράμη πνοαῖς,  
κυλίνδει βυσσόθεν (590)  
κελαινὰν θίνα καὶ δυσάνεμοι  
στόνων βρέμουσιν ἀντιπλήγες ἀκταί.  
ἀρχαῖα τὰ Λαβδακιδᾶν οἰκῶν ὀρώμαι  
πήματα φθιτῶν ἐπὶ πῆμασι πίπτοντ', (595)  
οὐδ' ἀπαλλάσσει γενεὰν γένος, ἀλλ' ἐρείπει  
θεῶν τις, οὐδ' ἔχει λύσιν.  
νῦν γὰρ ἐσχάτας ὑπὲρ  
ρίζας ἐτέτατο φάος ἐν Οἰδίπου δόμοις· (600)  
κατ' αὖ νιν φοινία  
θεῶν τῶν νερτέρων ἀμᾶ κοπῖς<sup>20</sup>,  
λόγου τ' ἄνοια καὶ φρενῶν Ἐρινύς. (586-603)

φοιτᾷς δ' ὑπερπόντιος ... (785)

... ἐν τ'  
ἀγρονόμοις αὐλαῖς· (785-786)

σὺν καὶ δικαίων ἀδίκους  
φρένας παρασπᾷς ἐπὶ λῶβα·  
σὺν καὶ τόδε νεῖκος ἀνδρῶν  
ξύναιμον ἔχεις παράξας· (791-794)

2<sup>nd</sup> St. において、神が家を揺さぶるその様子は、まるで、海の波のうねりが海底の砂を巻き上げそれが風に吹きさらされ (587-591) 岸を呻き轟かせるかのようなのである (591-593)、とされ、オイディプースの家の最後の根もまた、まるで、畑の収穫作業であるかのように刈られようとしている (599-602)、とされるが、3<sup>rd</sup> St. において、<sup>エロース</sup>愛は取り憑いた人間とともに海を越え大地を訪れる (785-786)、とされる。また、2<sup>nd</sup> St. において、言葉における無分別と心における狂気 (603) は、今、(国を統べているクレオーンによって、かつて国を統べていた) オイディプースの家の根絶を招こうとしているが、3<sup>rd</sup> St. において、<sup>エロース</sup>愛は正しき者の心をも不正にねじ曲げ (791-792)、(今、この国を統べている) この血の繋

\*20 伝承は *κόνης* (cf. Jebb 114-115 ad vv. 601 f.). しかしながら、cf. Lloyd-Jones & Wilson 129 ad v. 602.

がった男たち（すなわち、クレオンとハイモーン）の諍いを引き起こした（793-794）、とされる。

τεάν, Ζεῦ, δύνασιν τίς ἀν-  
δρῶν ὑπερβασία κατάσχοι; (605)  
τὰν οὐθ' ὕπνος αἰρεῖ ποθ' ὁ †παντογῆρως†  
οὐτ' ἀκάματοι θεῶν  
μῆνες, ἀγῆρως δὲ χρόνῳ δυνάστας  
κατέχεις Ὀλύμπου  
μαρμαρόεσσιν αἴγλαν. (610)  
τό τ' ἔπειτα καὶ τὸ μέλλον  
καὶ τὸ πρὶν ἐπαρκέσει  
νόμος ὅδ' οὐδέν' ἔρπει  
θνατῶν βίοςτος ἀμύπολυς ἐκτὸς ἄτας. (604-614)

καὶ σ' οὐτ' ἀθανάτων φύξιμος οὐδεὶς  
οὐθ' ἀμερίων σέ γ' ἀν-  
θρώπων, ὁ δ' ἔχων μέμνηεν. (787-790)  
  
νικᾷ δ' ἐναργῆς βλεφάρων (795)  
ἥμερος εὐλέκτρον  
νύμφας, τῶν μεγάλων πάρεδρος  
ἐν ἀρχαῖς  
θεσμῶν. (795-799)

2<sup>nd</sup> St. において、人間の僭越行為は、ゼウスの力を制御することはできない（604-605）が、3<sup>rd</sup> St. において、不死なる神々も死すべき人間も <sup>エロース</sup>愛を逃れることができず（787-790）、これを得た者は心が狂う（790）、とされる。2<sup>nd</sup> St. において、ゼウスの法は、今後も、未来も、そして、過去も支配し続ける（611-613）、すなわち、死すべき人間の富に満ちた暮らしは <sup>アーテ</sup>迷妄からは免れない、と（613-614）。これに対して、3<sup>rd</sup> St. において、勝利 <sup>ヒュメル</sup>を収めるのは閨の悦びを約束する花嫁の瞳に宿る欲望であり（795-797）、これが偉大な法の傍にあって支配している（797-799）、とされる。

σοφία γὰρ ἔκ του (620)  
κλεινὸν ἔπος πέφανται,  
τὸ κακὸν δοκεῖν ποτ' ἐσθλὸν  
τῷδ' ἔμμεν ὄτω φρένας  
θεὸς ἄγει πρὸς ἄταν  
πράσσει δ' ὀλίγος τὸν χρόνον ἐκτὸς ἄτας. (625)

καὶ σ' οὐτ' ἀθανάτων φύξιμος οὐδεὶς  
οὐθ' ἀμερίων σέ γ' ἀν-  
θρώπων, ὁ δ' ἔχων μέμνηεν. (790)  
σὺ καὶ δικαίων ἀδίκους  
φρένας παρασπᾶς ἐπὶ λώβα. (787-792)

2<sup>nd</sup> St. において、神がその心 <sup>アーテ</sup>を迷妄 <sup>カコン</sup>に向ける者には禍いも <sup>エストロン</sup>幸いであるように見える（622-624）が、そもそも、人間が <sup>アーテ</sup>破滅から免れて暮らせるのは東の間に過ぎない（625）、とされる。これに対して、3<sup>rd</sup> St. において、不死なる神々も死すべき人間も <sup>エロース</sup>愛を逃れることができず（787-790）、これを得た者は心が狂う（790）、そして、<sup>エロース</sup>愛は正しき者の心をも不正にねじ曲げ <sup>ローベ</sup>破滅へと導く（791-792）、とされる。

### 2.3 S. Ant. 三つのオードの比較のまとめ

上記の比較を整理すると、およそ、以下のようになる。

1<sup>st</sup> St. において、世界を支配するのは人間であるが（332-333 πολλὰ τὰ δεινὰ κοῦδὲν ἀν-



θρώπου δεινότερον πέλει)、2<sup>nd</sup> St. において、人間を支配するのはゼウスであり (604-605 τεάν, Ζεῦ, δύνασιν τίς ἀν- | δρῶν ὑπερβασία κατάσχοι;)、3<sup>rd</sup> St. において、神々も人間も支配するのは<sup>エロース</sup>愛である (787-790 καί σ' οὐτ' ἀθανάτων φύξιμος οὐδείς | οὐθ' ἀμερίων σέ γ' ἀν- | θρώπων, ὁ δ' ἔχων μέμνην)。

1<sup>st</sup> St. において、人間の支配は海にも大地にも及ぶが<sup>カ</sup> (334-336 τοῦτο καὶ πολιοῦ πέραν | πόντου χειμερίῳ νότῳ | χωρεῖ, ..., 338-339 θεῶν | τε τὰν ὑπερτάταν, Γᾶν | ἄφθιτον, ἀκαμάταν ἀποτρύεται)、2<sup>nd</sup> St. において、ゼウスは人間にまるで海の嵐のような禍いを与え (587-593 ὥστε ποντίας ἁλὸς | οἶδμα ... | κυλίνδει βυσσόθεν | κελαινὰν θίνα καὶ δυσάνεμοι | στούνῳ βρέμουσιν ἀντιπλήγες ἀκταί)、その人間の家筋の根を畑の収穫のように刈り取ろうとするが<sup>カ</sup> (599-602 νῦν γὰρ ἐσχάτας ὑπὲρ | ρίζας ἐτέτατο φάος ἐν Οἰδίπου δόμοις· | κατ' αὐτὴν νιν φοινία | θεῶν τῶν νερτέρων ἀμᾶ κοπίς)、3<sup>rd</sup> St. において、<sup>エロース</sup>愛もまた海にも大地にも行き渡るものである (785-786 φοιτᾷς δ' ὑπερπόντιος ἐν τ' | ἀγρονόμοις αὐλαῖς)。

1<sup>st</sup> St. において、人間は言語と思考そして国を統べる心構えを自ら学んだが<sup>カ</sup> (353-356 καὶ φθέγμα καὶ ἀνεμόεν φρόνημα καὶ ἀστυνόμους | ὀργὰς ἐδιδάξατο)、2<sup>nd</sup> St. において、人間はゼウスによって心が<sup>アーチ</sup>迷妄に向けられると (623-624 ὅτῳ φρένας | θεὸς ἄγει πρὸς ἅταν) 言葉における無分別と心における狂気 (603 λόγου τ' ἄνοια καὶ φρενῶν Ἑρινύς) に陥る、しかし、3<sup>rd</sup> St. において、<sup>エロース</sup>愛は正しき者の心をも不正にねじ曲げ (791-792 σὺ καὶ δικαίων ἀδίκους | φρένας παρασπᾶς ἐπὶ λώβῃ) (この) 血の繋がった男たちの諍いを引き起こしてしまふ (793-794 σὺ καὶ τόδε νεῖκος ἀνδρῶν | ξύναιμον ἔχεις παράξας)。

1<sup>st</sup> St. において、<sup>さか</sup>賢しくも臨機応変な術を<sup>すべ</sup>望みを越えて持つ者は (365-367 σοφόν τι τὸ μηχανόεν τέχνας ὑπὲρ ἐλπίδ' ἔχων) ある時は禍いへある時は幸いへと歩み寄る (367 τότε μὲν κακόν, ἄλλοτ' ἐπ' ἐσθλὸν ἔρπει) が、2<sup>nd</sup> St. において、ゼウスがその心を<sup>アーチ</sup>迷妄に向ける者には禍いも幸いであるように見える (622-624 τὸ κακὸν δοκεῖν ποτ' ἐσθλὸν | τῷδ' ἔμμεν ὅτῳ φρένας | θεὸς ἄγει πρὸς ἅταν) が、3<sup>rd</sup> St. において、<sup>エロース</sup>愛を得た者は神々であつても人間であつても (必ず) 心が狂う (787-790 καί σ' οὐτ' ἀθανάτων φύξιμος οὐδείς | οὐθ' ἀμερίων σέ γ' ἀν- | θρώπων, ὁ δ' ἔχων μέμνην)。

すなわち、この三つのオードにおいて、人間、ゼウス、<sup>エロース</sup>愛には、前者よりも後者が優越する階層関係があるのであり、これは、「オードを跨いだプリアメル」とでもいうべきものである。そして、このオードを跨いだプリアメルは、本論冒頭にも示したように、A. Cho. 1<sup>st</sup> St. 冒頭二スタンザにおける「大地にも海にも恐ろしいものは数多あるが、人間の<sup>ヒュベルトルモス</sup>傲慢はさらに恐ろしく、向こう見ずな女どもの非情な<sup>エロース</sup>愛はさらに恐ろしい」、というプリアメルと比較が可能である。

### 3 A. Cho. 1<sup>st</sup> St. 冒頭ニスタンザと S. Ant. 三つのオードの比較

両者を具体的に比較すると、以下の通りとなる：

#### A. Cho. 1<sup>st</sup> St. (585–602)

πολλὰ μὲν γὰρ τρέφει (585)  
 δεινὰ δειμάτων ἄχη,  
 πόντιαί τ' ἀγκάλαι κνωδάλων  
 ἀνταίων βροτοῖσι πλή-  
 θουσι· βλάπτουσι καὶ πεδαίχμοι  
 λαμπάδες πεδάοροι (590)  
 πανὰ τε καὶ πεδοβάμονα· κἀνεμόεντ' ἄν  
 αἰγίδων φράσαι κότον.

ἀλλ' ὑπέρτολμον ἀν-  
 δρὸς φρόνημα τίς λέγοι (595)

καὶ γυναικῶν φρεσὶν τλημόνων  
 παντόλμους ἔρωτας, ἄ-  
 ταισι ( ) συννόμους βροτῶν;

ξυζύγους δ' ὀμαυλίας  
 θηλυκρατῆς ἀπέρωτος ἔρωσ παρανικᾷ (600)  
 κνωδάλων τε καὶ βροτῶν.

#### S. Ant. 1<sup>st</sup> St.

πολλὰ τὰ δεινὰ κοῦδέν ἀν-  
 θρώπου δεινότερον πέλει·  
 τοῦτο καὶ πολιοῦ πέραν  
 πόντου χειμερίῳ νότῳ (335)  
 χωρεῖ, περιβρυχίοισιν  
 περῶν ὑπ' οἰδμασιν, θεῶν  
 τε τὰν ὑπερτάταν, Γᾶν  
 ἄφθιτον, ἀκαμάταν ἀποτρύεται,  
 ἰλλομένων ἀρότρων ἔτος εἰς ἔτος, (340)  
 ἵππειῳ γένει πολεύων. (332–341)

#### S. Ant. 2<sup>nd</sup> St.

τέαν, Ζεῦ, δύνασιν τίς ἀν-  
 δρῶν ὑπερβασία κατὰσχοι; (604–605)

· · · · ·

ἀ γὰρ δὴ πολὺπλαγκτος ἔλ- (615)  
 πὶς πολλοῖς μὲν ὄνησις ἀνδρῶν,  
 πολλοῖς δ' ἀπάτα κουφονόων ἐρώτων· (604–617)

#### S. Ant. 3<sup>rd</sup> St.

Ἔρωσ ἀνίκατε μάχαν,  
 Ἔρωσ, ὃς ἐν κτήμασι πίπτεις,<sup>21</sup>  
 ὃς ἐν μαλακαῖς παρειαῖς  
 νεάνιδος ἐννυχεύεις,

· · · · ·

καί σ' οὐτ' ἀθανάτων φύξιμος οὐδεὶς  
 οὔθ' ἁμερίων σέ γ' ἀν-  
 θρώπων, ὃ δ' ἔχων μέμνηεν. (790)  
 σὺ καὶ δικαίων ἀδίκους  
 φρένας παρασπᾶς ἐπὶ λώβᾳ·  
 · · · · · (781–800)

\*21 Cairns は、Ant. 615–619 について Sol. 13 W 71–76, 11–13 からの影響を論じ、ソローンでは明示的な ὕβρις – κέρδος – ἄτη の繋がりは、2<sup>nd</sup> St. においては、613–614 οὐδέν' ἔρπει | θνατῶν βίσιος πάμπολυς ἐκτὸς ἄτας という形で触れられるだけである、と但し書きしている (Cairns 16)。しかしながら、本文の比較が示しているように、ἄτη – ἔρωτες / Ἔρωσ という形にまで広く捉えるならば、この繋がりは、本悲劇においても明示的に示され得る、と考えられる、すなわち：Ant. 781–782 Ἔρωσ ἀνίκατε μάχαν, | Ἔρωσ, ὃς ἐν κτήμασι πίπτεις, .... cf. n. 16.

A. Cho. 1<sup>st</sup> St. において、大地はたくさんの恐るべき労苦を養い (585-586)、海の深き懷は敵意ある怪物に満ち (587-589)、天地の間には流星や怒れる風孕む嵐がある (589-593)。しかし、人々は解き明かすことができない、人間の大胆に過ぎる傲慢<sup>フロネーマ</sup>を (594-595)、そして、向こう見ずな女たちの非情な愛<sup>エローテス</sup>を (596-597)、死すべき者々の破滅<sup>アータイ</sup>を伴う愛<sup>エローテス</sup>を (597-598)。すなわち、人間や動物の区別なく、女を狂わす愛ならぬ愛が、夫婦の絆を打ち負かすのだ (599-602)。

S. Ant. 1<sup>st</sup> St. において、恐ろしいものがたくさんあるが、人間より恐ろしいものはない (332-333)、人間は海を越え大地を痛めつける (335-341)。しかし、2<sup>nd</sup> St. において、人間の僭越<sup>ヒュベルバシアー</sup>／過ちはゼウスの力を抑えることはできず (604-605)、その彷徨わせる希望<sup>エルピス</sup>は、多くの人々にとって空しい欲望による欺瞞となる (615-617)。そして、3<sup>rd</sup> St. において、愛<sup>エロース</sup>は戦いにおいて打ち負かすことができず (781)、神々も人間も逃れることができず (787-789)、これを得た者は心が狂う (790)。そして、この愛<sup>エロース</sup>は、正しき者の心をも不正にねじ曲げ、破滅<sup>ローベ</sup>へと導くのだ (791-792)。

A. Cho. 1<sup>st</sup> St. と S. Ant. 1<sup>st</sup> St. について、冒頭からの類似性は、よく知られている (A. Cho. 585-586 πολλὰ μὲν γὰρ τρέφει | δεινὰ δειμάτων ἄχη, ... と S. Ant. 332 πολλὰ τὰ δεινὰ ...)\*22。前者における大地、海、空への言及と、後者における海、大地、空 (cf. S. Ant. 342-343 φῦλον ὄρ- | νίθων) への言及の類似性も、知られている\*23。

また、A. Cho. 1<sup>st</sup> St. において人間の大胆に過ぎる傲慢<sup>フロネーマ</sup>が導入される際の詩行 (A. Cho. 594-595 ἀλλ' ὑπέρτολμον ἄν- | δρὸς φρόνημα τίς λέγει ...;) と、S. Ant. 2<sup>nd</sup> St. において人間の僭越<sup>ヒュベルバシアー</sup>／過ちも抑えられないゼウスの力が導入される詩行 (604-605 τεάν, Ζεῦ, δύνασιν τίς ἄν- | δρῶν ὑπερβασία κατάσχοι;) が、内容のみならず構文までもが類似していることも、知られている (恐らく、意図的な文体模倣であろう\*24)。

そして、A. Cho. 1<sup>st</sup> St. における、女を狂わす「愛ならぬ愛が打ち負かす」、という表現 (A. Cho. 599-602 ξυζύγους δ' ὀμαυλίας | θηλυκρατῆς ἀπέρωτος ἔρως παρανικᾷ | κνωδάλων τε καὶ βροτῶν) と、S. Ant. 3<sup>rd</sup> St. における、戦えば「打ち負かすことのできない」愛<sup>エロース</sup>が正

\*22 Jebb 70 ad v. 332, Cairns 7-8.

\*23 詳細な比較については、cf. Cairns 7-8.

\*24 抽象的な可能性を表す ἄν の省略された希求法において、否定の答えが要求される修辞疑問文の形になっているのは、現存するテキストにおいては、A. Cho. 594-598 ἀλλ' ὑπέρτολμον ἄν- | δρὸς φρόνημα τίς λέγει | ...; と S. Ant. 604-605 τεάν, Ζεῦ, δύνασιν τίς ἄν- | δρῶν ὑπερβασία κατάσχοι; の二例だけのようである。これに対して、単純に否定文または肯定文の形である例は、cf. Hom. Il. 19.321, Od. 3.231. οὐκ ἔστιν ὅστις ... に後続し従属節を形成する例としては、cf. A. PV 292, Ag. 620, Cho. 172, E. Alc. 52 (cf. Jebb 116 ad v. 604, Griffith 227 ad vv. 604-5, Smyth 406-407 [§1821]).

しき者の心をも不正にねじ曲げ「打ち負かすことのできない」ものとして支配している、という表現 (781 *Ἔρως ἀνίκατε μάχαν*, ... 791 ff. *σὺ καὶ δικάων ἀδίκους* | *φρένας παρασπᾶς ἐπὶ λῶβα*: ... *νικᾶ δ'* ... *ἕμερος* ...) も、また、*νικᾶ*, *παρανικᾶ*, *ἀνίκατε* といった同じ語源の単語が用いられ、そして、*ἀπέρωτος ἔρως*, *δικαίων ἀδίκους* といった反対の意味の単語が隣接する表現が用いられている、という点で類似している\*25。

このように、S. *Ant.* 1<sup>st</sup> St., 2<sup>nd</sup> St., 3<sup>rd</sup> St. の三つのオードは、A. *Cho.* 1<sup>st</sup> St. 冒頭二スタンザ (585–602) に対して、プリアメルという構成において、さらには主要な詩行の単語・構文において、具体的な対応関係が見られるのであり、このことは、後者が前者の直接的な文学的資源 (のひとつ) となっていることを強く示唆するものである。

ただし、この A. *Cho.* 1<sup>st</sup> St. 冒頭二スタンザと S. *Ant.* 三つのオードには、三つの相違が見られる。第一は、S. *Ant.* 1<sup>st</sup> St. においては人間が最も恐るべき存在となった根拠である「智慧による様々な達成のカタログ」が展開されるが、A. *Cho.* 1<sup>st</sup> St. 冒頭二スタンザにはそれが見られないことである。第二は、S. *Ant.* 2<sup>nd</sup> St. においては人間が<sup>ヒュベルバシアー</sup>傲<sup>アーテー</sup>慢に陥るとゼウスの怒りを買って迷妄に取り憑かれる、という「蔑ろにされたゼウスの怒りと介入」が示されているが、A. *Cho.* 1<sup>st</sup> St. 冒頭二スタンザにはそれが見られないことである。第三は、A. *Cho.* 1<sup>st</sup> St. 冒頭二スタンザにおける「<sup>エローテス</sup>愛<sup>アータイ</sup>に伴う破滅」は妻と姦夫によって夫が謀殺されたことを指しているが、S. *Ant.* 3<sup>rd</sup> St. における「<sup>エロース</sup>愛<sup>アーテー</sup>が導く破滅」は息子の<sup>いいなづけ</sup>許嫁の死が息子と妻の死を引き起こすことを指している、ということである。第一、第二の相違は S. *Ant.* 三つのオードがさらに別の文学的資源を踏まえていることによるものと考えられ、第三の相違はそれらによって「愛による破滅」の意味合いに変化がもたらされたことによるものと考えられる。

これらの相違をもたらしした要因については本論の最後で論ずることとし、ここでは、「智慧による様々な達成のカタログ」、「蔑ろにされた神の怒りと介入」、「子供の結婚の失敗がもたらす<sup>アーテー</sup>破滅」が扱われ、なおかつ「人間が<sup>ヒュベルバシアー</sup>傲<sup>アーテー</sup>慢に陥ると、迷妄に取り憑かれ、<sup>エロース</sup>愛による破滅を被る」という、S. *Ant.* 三つのオードのプリアメルが指し示す悲劇の物語が継承されている類例を挙げたい。それは、A. *Sept.* の後日譚であり、クレオーンが七将の遺体の埋葬を禁じたところから始まる、エウリーピデース『救いを求める女たち』(以下、E. *Supp.*) における、テーセウスのアドラーストスに対する台詞である\*26。

\*25 Garvie 208–209 ad vv. 599–602.

\*26 当該箇所の一部 (201–218) は、Sano によって「プロメーテウス神話」に関わるテキスト群として分類され、S. *Ant.* 1<sup>st</sup> St. と綿密に比較されている (Sano 34, 46)。

## 4 E. Supp. 201–228 と S. Ant. 三つのオードの比較

このテーセウスの台詞を S. Ant. 三つのオードと突き合わせると、以下のようになる。  
すなわち\*27：

|                                  |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
|----------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 智慧から傲慢へ：<br>cf. S. Ant. 332–371  | αἰνῶ δ' ὅς ἡμῖν βίοντον ἐκ πεφυρμένου<br>καὶ θηριώδους θεῶν διεσταθμήσατο,<br>πρῶτον μὲν ἐνθεὶς σύνεσιν, εἶτα δ' ἄγγελον<br>γλῶσσαν λόγων δούς, ὥστε γιγνώσκειν ὅπα,<br>... (201–215)                                                                                                                                                                                                                 |
| 傲慢から迷妄へ：<br>cf. S. Ant. 604–614  | ἀλλ' ἡ φρόνησις τοῦ θεοῦ μεῖζον σθένειν<br>ζητεῖ, τὸ γαῦρον δ' ἐν φρεσὶν κεκτημένοι<br>δοκοῦμεν εἶναι δαιμόνων σοφώτεροι.<br>ἧς καὶ σὺ φαίνῃ δεκάδος, οὐ σοφὸς γεγώς, (216–219)                                                                                                                                                                                                                       |
| 子供の結婚の失敗：<br>cf. S. Ant. 771–800 | ὅστις κόρας μὲν θεσφάτοις Φοίβου ζυγεῖς (220)<br>ξένοισιν ᾧδ' ἔδωκας ὡς δόντων θεῶν,<br>λαμπρὸν δὲ θολερῶι δῶμα συμμείξας τὸ σὸν<br>ἥλκωσας οἴκους· χρὴ γὰρ οὔτε σώματα<br>ἄδικα δικαίοις τὸν σοφὸν συμμειγνύναι<br>εὐδαιμονοῦντάς τ' ἐς δόμους κτᾶσθαι φίλους. (225)<br>κοινὰς γὰρ ὁ θεὸς τὰς τύχας ἡγούμενος<br>τοῖς τοῦ νοσοῦντος πῆμασιν διώλεσεν<br>τὸν οὐ νοσοῦντα· κούδεν ἡδίκηκότα. (220–228) |

(E. Supp. 201–228)

Supp. 201–228 において、テーセウスは、アドラーストスに対して、およそ以下のよう  
なことを述べている。すなわち、「神は、人間に、まず知性を、言語を、そして、大地の  
実りを与えた。また、冬の嵐を防ぎ、太陽の灼熱を避ける術、そして、航海の、占いの術  
を与えた (201–215)。ところが、これほどまでの術を授けられながら、我々人間は、傲慢  
にも欲するのだ\*28、神々よりも強くなることを、そして、傲慢にも考えるようになるの  
だ、神々よりも智慧がある、と (216–218)。アドラーストスよ、お前も、そうした人間ら  
しい。愚かにも、フォイボスの神託に縛られて娘を異国の者の手に渡し、そのためにお前  
の輝かしい家筋を狂気に苦しむそれに混ぜ合わせ\*29、家名を酷く傷付けたのだ。そのよう

\*27 エウリーピデースのテキストは、見解の分かれている読みも含めて、Diggle に拠る。

\*28 216–217 ἡ φρόνησις τοῦ θεοῦ μεῖζον σθένειν | ζητεῖ の ἡ φρόνησις について、同じ語源の単語が同じ否定的  
な意味で用いられている類例として、cf. A. Cho. 594–595 (1<sup>st</sup> St.) ἀλλ' ὑπέρολμον ἄν- | δρὸς φρόνημα τίς  
λέγοι | ...; 文脈から、前者には後者からの影響がある、と考えるべきであろう。

\*29 アドラーストスが娘アルゲイアーを妻として与えた相手は、いうまでもなく、S. Ant. 2<sup>nd</sup> St. でその迷妄が  
歌われた、「ラブダコス家の末裔」の一人であるポリュネイケースであった。222–223 λαμπρὸν δὲ θολερῶι

なことをすべきではなかった。というのも、神は、罪のある者の禍いによって、罪のない者を滅ぼすものなのだから (219-228)」。

これに対して、本論で検討してきた *Ant.* 三つのオードを、悲劇の物語<sup>ミュートス</sup>を踏まえてクレオンに引き付けて要約し直すと、次のようになる。すなわち、「世界に人間ほど恐ろしいものはない。人間は、航海の術を、農耕の術を、鳥や獣や魚を捕らえる術を、そして、言葉を、思考を、政治を自ら学んだ……。それでも、人間は、神に誓った正義を守らなくてはならない (1<sup>st</sup> St.)。ところが、クレオンよ、お前は、人間の身でありながら、傲慢にも、神の法を蔑ろにして自らの法を強要し、ゼウスの怒りを買ひ、迷妄<sup>アーテ</sup>に取り憑かれて<sup>ミュートス</sup>いる (2<sup>nd</sup> St.)。いずれ、お前は、息子が許嫁の後を追って自殺する、という<sup>エロース</sup>愛による破滅を被ることになるであろう。というのも、<sup>エロース</sup>愛は、偉大な法の傍にあって、支配しているのだから (3<sup>rd</sup> St.)」。

「傲慢な」アドラーストスは、(フォイボスの神託を解き損なって (137-146)) 娘を呪われた家の者の手に渡し、その結果として (アンフィアラオスの予言を聞き入れることもなく (155-159)) テーバイ攻めを敢行し敗北の憂き目に遭ったのであり、これは「傲慢」に陥った者が「女の贈与」を伴う局面において迷妄<sup>アーテ</sup>に取り憑かれて<sup>ミュートス</sup>\*30 被ることになった「神罰としての破滅」であった。

また、「傲慢な」クレオンも、神の法を蔑ろにして自らの法を強要し (イスメーネーの説得にも関わらず (566-576)) アンティゴネーの死刑について決意を翻さなかったために、息子のハイモンが許嫁の後を追って自殺するという憂き目に遭ったのであり、これもやはり「傲慢」に陥った者が迷妄<sup>アーテ</sup>に取り憑かれて<sup>ミュートス</sup>被ることになった、「女の贈与」を伴う局面における「神罰としての破滅」であった。

ゆえに、この *A. Cho.* 1<sup>st</sup> St. 冒頭二スタンザにおける<sup>エロース</sup>「愛による破滅」<sup>アーテ</sup>は、*S. Ant.* 三つのオードにおいては、女の贈与に伴う「神罰としての破滅」<sup>ミュートス</sup>という形に読み替えられたといえるのであり、これが、悲劇の物語<sup>ミュートス</sup>に反映され、*E. Supp.* 201-228 にも継承されて行った、と考えられるのである。

さて、先の考察において、*A. Cho.* 1<sup>st</sup> St. 冒頭二スタンザと *S. Ant.* 三つのオードを比較したときに見られた「人間の技術のカatalogue」、「ゼウスの怒りと介入」という相違は異なる文学的資源に拠るものである、と想定したのであった。この、女の贈与に伴う「神罰とし

δῶμα συμμείξας τὸ σὸν | ἡλικωσας οἴκους という表現には、*A. Sept.* 752-756 ... Οἰδιπόδαν, ὅσπερ ματρὸς ἄγναν | σπείρας ἄρουραν ἔν' ἐτράφη | ῥίζαν αἱματώεσσαν | ἔτλα, *S. Ant.* 599-600 νῦν γὰρ ἐσχάτας ὑπὲρ | ῥίζας ἐτέτατο φάος ἐν Οἰδίου δόμοις の痕跡が窺われる。

\*30 cf. 137 (Θη) τὴν εἰς ἔρωτα τῇσδε κηδείας μολών· cf. *S. Ant.* 615-617.

ての破滅」を踏まえて、改めて S. *Ant.* 三つのオードのプリアメルが指し示す悲劇の物語「人間が<sup>ヒュベルバシアー</sup>傲慢に陥ると、<sup>アーテー</sup>迷妄に取り憑かれ、<sup>エロース</sup>愛による破滅を被る」を振り返ったとき、私は、これらが、Sol. 13 W (, A. PV 442–503), A. *Cho.* 1<sup>st</sup> St. 等とともに主要な文学的資源として拠っていたのは、ヘーシオドス『仕事と日』(以下、Hes. *Op.*) 47–105 の、いわゆる「パンドーレーの瓶の神話」でなかったのではないか、と考えるのである。

## 5 Hes. *Op.* 47–105 「パンドーレーの瓶の神話」と S. *Ant.* 三つのオードの比較

「パンドーレーの瓶の神話」は、以下のように要約される、すなわち、プロメーテウスは人間のためにゼウスの隠した火を盗み取ったが(47–52)、ゼウスはこの火を盗んだ罰として女パンドーレーを贈った(53–83)、そして、パンドーレーは瓶の蓋を開けて中身を撒き散らし、その結果、数多の厄災が人間の間に跳梁することになった(95–105)、と。ここには、プロメーテウスから火が与えられ、ゼウスからその代償として女が贈られ、それによって数々の禍いがもたらされた、という、現在人間が置かれている苦境の原因が描かれている。

綿密な比較によって立証されていることであるが、1<sup>st</sup> St. における「人間の技術のカタログ」は、前 5 世紀中～末期にかけて現れた「プロメーテウス神話」に関わるテキスト群、すなわち A. PV 442–503, Pl. *Prt.* 321 C–322 D, E. *Supp.* 201–218 と高い親和性がある<sup>\*31</sup>。そして、プラトーンが描くプロタゴラスによれば、プロメーテウスの与えた数多の技術は、火なくしては、人間にとって、技術の智慧を獲得することも、利用することもできないものであり(Pl. *Prt.* 321 D2–3 ἀμύχανον γὰρ ἦν ἄνευ πυρὸς αὐτὴν κτητὴν τῷ ἢ χρησίμην γενέσθαι)、さらには、プロメーテウスの火盗みは、これら「プロメーテウス神話」に関わるテキスト群が依拠している最も古い神話においては、「神罰として贈られた女」と分かち難く結び付いているのであった(Hes. *Op.* 60–105, *Th.* 570–616)。ゆえに、「人間が獲得した技術・智慧のカタログ」は、「プロメーテウスの火盗み」から出発し「神罰として贈られた女」へと終着する、いわば潜在的な文脈を有しているといえ、これらは、本来、一続きのものとして考えられるものである。

そもそも、Hes. *Op.* 47–105 「パンドーレーの瓶の神話」には、S. *Ant.* 三つのオードで論じられてきた主要な要素が、多少異なった文脈においてであるとはいえ、およそ全て現れているように思われるのである。本論では、それらの要素がまとまった形で見られる *Op.*

\*31 Sano 36–39.

90–105 について、考えてみたい\*32：

πρὶν μὲν γὰρ ζώεσκον ἐπὶ χθονὶ φύλ' ἀνθρώπων 90  
 νόσφιν ἄτερ τε κακῶν καὶ ἄτερ χαλεποῖο πόνοιο  
 νούσων τ' ἀργαλέων αἵ τ' ἀνδράσι κῆρας ἔδωκαν 92  
 ἀλλὰ γυνὴ χεῖρεσσι πίθου μέγα πῶμ' ἀφελούσα 94  
 ἐσκέδασ' ἀνθρώποισι δ' ἐμήσατο κήδεα λυγρά. 95  
 μούνη δ' αὐτόθι Ἑλπίς ἐν ἀρρήκτοις δόμοισιν  
 ἔνδον ἔμιμνε πίθου ὑπὸ χεῖλεσιν, οὐδὲ θύραζε  
 ἐξέπτῃ· πρόσθεν γὰρ ἐπέμβαλε πῶμα πίθοιο  
 αἰγιόχου βουλῇσι Διὸς νεφεληγερέταο.  
 ἄλλα δὲ μυρία λυγρὰ κατ' ἀνθρώπους ἀλάλῃται 100  
 πλείη μὲν γὰρ γαῖα κακῶν, πλείη δὲ θάλασσα·  
 νοῦσοι δ' ἀνθρώποισιν ἐφ' ἡμέρη, αἱ δ' ἐπὶ νυκτί  
 αὐτόμαται φοιτῶσι κακὰ θνητοῖσι φέρουσαι  
 σιγῇ, ἐπεὶ φωνὴν ἐξείλετο μητίετα Ζεὺς.  
 οὕτως οὐ τί πη ἔστι Διὸς νόον ἐξαλέασθαι. 105  
 (Hes. *Op.* 90–105)

Hes. *Op.* 90–105 は、次のように要約される。すなわち、火を盗み与えられた人間に対して、ゼウスは、その罰として、抱き締め心から愉しむ<sup>カコン</sup>として女を贈ったところ (cf. 57–58 τοῖς δ' ἐγὼ (i.e. Ζεὺς) ἀντὶ πυρὸς δώσω κακόν, ᾧ κεν ἅπαντες | τέρπωνται κατὰ θυμόν, ἐὼν κακὸν ἀμφαγαπῶντες)、その女は、瓶の大蓋を取り去り中身を撒き散らし、悲惨な厄災をもたらした (94–95)。しかし、希望だけが瓶の口の下に残り、外には飛び出なかった (96–98)。これまで、地上で生きてきた人間の種族は、禍いの数々から、すなわち苛酷な労働や死をもたらす苦しい病から免れていたが (90–92)、この女のために、人間どもの間に、無数の悲惨が彷徨うこととなった (100)。というのも、禍いの数々は大地にも海にも満ちており、病は夜となく昼となく自らの意志で人間に訪れるからだ (101–104)。しかし、そもそも、瓶の蓋を閉じて希望を閉じ込めたのもゼウスの思惑ならば (98–99)、病が訪れることによって禍いの数々が気付かれることなくもたらされるのもゼウスの仕業である (103–104)。このように、なにものも、決してゼウスの意図を逃れることなどできないのである (105)。

これに対して、本論で検討してきた *S. Ant.* 三つのオードを、Hes. *Op.* 90–105 に突き合わせて要約し直すと、次のようになる。すなわち、火をはじめ (cf. *Pl. Prt.* 321 D2–3) 様々な智慧を自ら獲得し恐るべき存在となった人間は (*Ant.* 332–333)、(生活の糧を求め) 海にも大地にも進出して行き (334–336)、起こり得ることに必ず策を以て立ち向かう

\*32 ヘーシオドスのテキストは、見解の分かれている読みも含めて、West に拠る。



(360-361)。もつとも、その智慧を以てしても、死を逃れることまではできないのであるが(361-362)。しかしながら、人間は、自分の智慧によって、思いもよらずに禍<sup>カコン</sup>いにも幸<sup>エストロン</sup>いにも導かれるものであり(365-367)、その、人間を遠くへと彷徨<sup>エルビス</sup>わせる希望は、結局のところ、多くの人々にとって空しい欲望<sup>エローテス</sup>による欺瞞<sup>アバデー</sup>となるのだ(615-617)。その心を神が迷妄<sup>アーデー</sup>に向ける者には、禍<sup>カコン</sup>いもついに幸<sup>エストロン</sup>いであるように見えるのだが(622-624)、いずれにしても、破滅<sup>アーデー</sup>から免れて暮らせるのは、束の間に過ぎない(625)。いかなる人間の僭越<sup>ヒュベルバシアー</sup>／過ちも、ゼウスを抑えることはできず(604-605)、時によって老いることのない支配者として、ゼウスは、燦然と輝くオリュンポスに君臨する(608-610)。そして、閨の悦びを約束する花嫁の瞳に宿る愛<sup>エロース／アフロディーテー</sup>の神もまた、偉大なる法の傍にあって支配しているのだ(781, 795-799)。

両者において、火(*Op.* 50-52)そして火をはじめとする様々な智慧(*Pl. Prt.* 321 D2-3)、それらを(神からあるいは自ら)手にした人間(*Ant.* 359-360)、それでも逃れられない死(*Op.* 90-92, 101-104 と *Ant.* 361-362)、(火の代償として贈られる愛<sup>エロース</sup>の対象としての)女(*Op.* 57-58 と *Ant.* 795-799)、(利益<sup>オネーシス</sup>にも欺瞞<sup>アバデー</sup>にもなり得る両義的な)希望<sup>エルビス</sup>(*Op.* 96-98 と *Ant.* 615-617)\*33、ゼウスの絶対的な支配(*Op.* 105 と *Ant.* 608-610)、といった要素が共通して現れている。また、前者 *Op.* 90-105 において、無数の悲慘は海にも大地にも満ち溢れている(*Op.* 100)が、後者 *Ant.* 1<sup>st</sup> St. において、そうした事々に策を以て立ち向かうべく、人間(*Ant.* 360-361)もまた海にも大地にも進出する(*Ant.* 334-336, 338-340)、という意味で、両者に繋がりを見出すこともできるであろう。

## 6 ゼウスの罰として贈られた女

こうして、*S. Ant.* 三つのオードは、*A. Cho.* 1<sup>st</sup> St. 冒頭二スタンザから傲慢<sup>ヒュプリス</sup>—愛<sup>エロース</sup>—破滅<sup>アーデー</sup>のプリアメルを継承するにあたり、(*Sol.* 13 W 43-66 をはじめとする)「プロメーテウス神話」に関わるテキスト群から「人間の技術のカatalog」を、そして、(これら全てに影響を与えているであろう) *Hes. Op.* 47-105 「パンドーレーの瓶の神話」から「ゼウスの罰として贈られた女」という考え方を(改めて)持ち込み、これらを悲劇<sup>ミュートス</sup>の物語に反映させたのであった。

\*33 Cairns は、*Ant.* 615-619 について *Sol.* 13 W 33-36 からの影響を論ずるが、これらは、そもそも、*Op.* 94-98 に端を発しているように思われる。すなわち、希望は、既に、*Op.* の時点で善悪の区別が曖昧なものとして解釈される余地が残されており、*Sol.* 13 W において、これが希望の虚しさとして敷衍され、さらに、*Ant.* によって、(利益とも)欺瞞と(も)なる、という形に(*Jebb* 119 ad v. 616)継承されたのである(Cairns 15. cf. West 169-170 ad v. 96)。

このことを踏まえたとき、S. *Ant.* のテキストの以下の二つの点について、さらに理解が容易になるものと思われる。

第一は、アンティゴネーの埋葬問題に関わる言動と<sup>エロース</sup>愛のオード S. *Ant.* 3<sup>rd</sup> St. との関わりである。当時の観衆／読者は、1<sup>st</sup> St. において「人間の技術のカatalog」と亡国の民へ転落する恐れが歌われたとき（332–375）、その背後に、A. *Cho.* 1<sup>st</sup> St. 冒頭二スタンザと「プロメーテウス神話」を想起し、はやくも、その後にアンティゴネーという「女」とその<sup>エロース</sup>愛がもたらす<sup>ア</sup>破滅<sup>テ</sup>／<sup>エロース</sup>迷妄を、想像したはずである\*34。とはいえ、私たちから見て、同じ「傲慢な」人間を<sup>エロース</sup>愛によって打ち負かす存在であるとしても、姦夫と謀って夫を殺すようなクリュタイメーストラーと、兄の埋葬を主張して乙女のまま石室に連れて行かれて自死を遂げるアンティゴネーとでは、人物造形の相違があまりに甚だしい。

しかし、この「ゼウスの罰として贈られた女」という考え方を踏まえたとき、アンティゴネーの言動には、同じ<sup>エロース</sup>愛の罰を与える存在でありながら、先行者たるクリュタイメーストラーよりも遙かに強大な力と強固な正当性が賦与されていることが理解されることになる。すなわち、丁度、瓶の蓋を開けて禍いの数々を撒き散らし希望を手許に残して蓋を閉じたパンドレーがその実ゼウスの意のままに行動していたに過ぎないように\*35、アンティゴネーの言動もまた、確かに自らの意志によるものであったがその実ゼウスの神意によるものでもあった、という解釈が可能になるのである\*36。彼女の言動には、クリュタイメーストラーのような悪意は存在しない。むしろ、ゼウスの神意が関わっていたというべきである。

このことは、コロスが、278–279 ἀναξ, ἐμοί τοι μή τι καὶ θεήλατον | τοῦργον τόδ' ἡ ξύννοια βουλεύει πάλαι という台詞によって、かなり早い段階から（もちろんその後の展開など知るべくもないのであるが）神の関与を仄めかしていたことから裏付けられる。しかも、1<sup>st</sup> St. が歌われるきっかけとなったのは、クレオーンがこのコロスの発言を咎めたことであった\*37。コロスにとって（知らずしてではあるが）アンティゴネーの言動はゼウスの神意に即したものであり、彼らが「人間の技術のカatalog」を始めとする一連のオードを歌

\*34 Cairns 10.

\*35 厳密には、ゼウスの意のままにパンドレーが行ったことは、瓶の蓋を閉じたことだけである。cf. Hes. *Op.* 98–99.

\*36 cf. *Ant.* 450–457 (An.) οὐ γάρ τί μοι Ζεὺς ἦν ὁ κηρύξας τάδε, | οὐδ' ἡ ξύννοικος τῶν κάτω θεῶν Δίκη | τοιούσδ' ἐν ἀνθρώποισιν ὥρισεν νόμους, ..., 604–605 (2<sup>nd</sup> St.) τεάν, Ζεῦ, δύνασιν τίς ἀν- | δρῶν ὑπερβασία κατάσχοι; 795–799 (3<sup>rd</sup> St.) νικᾷ δ' ἐναργῆς βλεφάρων | ἥμερος εὐλέκτρον | νύμφας, τῶν μεγάλων πάρεδρος ἐν ἀρχαῖς | θεσμῶν, 925–928 (An.) ἀλλ' εἰ μὲν οὖν τάδ' ἐστὶν ἐν θεοῖς καλά, | παθόντες ἂν ξυγγνοῖμεν ἡμαρτηκότες· | εἰ δ' οἷδ' ἡμαρτάνουσι, μὴ πλείω κακὰ | πάθουεν ἢ καὶ δρῶσιν ἐκδίκως ἐμέ.

\*37 Sano 31–32.

い出した動機もまた（知らずしてではあるが）クレオーンの傲慢な言動に抗うことにあった、と考えることができるであろう。

第二は、イスメーネーとクレオーンの、<sup>エロース</sup>愛に関わる奇妙な台詞の数々である。クレオーンとの<sup>アゴーン</sup>論争におけるイスメーネーの台詞 568 ἀλλὰ κτενεῖς νυμφεῖα τοῦ σαυτοῦ τέκνου; ... 570 οὐχ ὥς γ' ἐκείνῳ τῇδ' ἔ' ἦν ἡρμοσμένα. ... 572 ὦ φίλταθ' Αἴμον, ὥς σ' ἀτιμάζει πατήρ<sup>エロース</sup>が、愛の主題の実質的な開始を告げるものである、ということは一般に了解されている\*38。イスメーネーは、頑迷なクレオーンに死刑の決意を翻させるために、息子のハイモーンとの婚約のを持ち出すのである\*39が、それでも、彼女のこの問題の切り出し方はいささか唐突で場違いな印象を与える。それは、クレオーンの受け答え 569 ἀρώσιμοι γὰρ χατέρων εἰσὶν γύαι. ... 571 κακὸς ἐγὼ γυναῖκας υἱέσι στυγῶ も同様であり、しかも、彼の場合、こうした台詞が 2<sup>nd</sup> St. を挟んでその後も続くのである：648–651 μὴ νῦν ποτ', ὦ παῖ, τὰς φρένας γ' ὑφ' ἡδονῆς | γυναικὸς οὔνεκ' ἐκβάλῃς, εἰδὼς ὅτι | ψυχρὸν παραγκάλισμα τοῦτο γίνεταί, | γυνὴ κακῇ ξύνευνος ἐν δόμοις.

しかし、この「ゼウスの罰として贈られた女」という考え方を踏まえたとき、イスメーネーやクレオーンの一連の台詞は、当時の観衆／読者にとっては、むしろ、本悲劇の主題に即した巧妙な台詞——すなわち、「人間の技術のカタログ」によって示される賢しくも傲慢な人間を代表するクレオーンに「女の贈与」を通じて禍いの数々がもたらされる、ということを確認に予告する台詞——であったことが理解されるのである。とりわけ、クレオーンの後者の台詞（648–651）は、例えば、Hes. *Op.* 57–58 τοῖς δ' ἐγὼ ἀντὶ πυρὸς δώσω κακόν, ὦ κεν ἅπαντες | τέρπωνται κατὰ θυμόν, ἐὼν κακὸν ἀμφαγαπῶντες を踏まえていた可能性があり\*40、彼らにとっては、「パンドレー神話」をより具体的に想起させるものであった、と考えることができるであろう。

このように、「人間の技術のカタログ」と「ゼウスの罰として贈られた女」は、一方で「賢しくも傲慢な人間」の姿を最大限に強調しながら、他方でいわば「ゼウスの御心のままに」禍いの数々をもたらす「女の贈与」という局面を作り出すことで、傲慢—愛—破滅という従来のプリアメルを踏まえながらさらにそれを刷新して、悲劇の物語においてゼウスが神罰を下す過程を克明に描くことをも可能にしたと考えられる。「プリアメル」、「カタログ」、「女の贈与」に関わる文学的伝統を正しく理解したとき、私たちは、これらがア

\*38 Griffith 216 ad v. 568.

\*39 Jebb 109 ad v. 568.

\*40 ヘーシオドスにおける他の類例として、Hes. *Op.* 373–375, 703–705 (Griffith 235 ad vv. 648–52). また、cf. Hes. *Op.* 85–89.

ンティゴネーが主張する「兄の埋葬」や「書かれざる法」と表裏一体を成し有機的に悲劇をまとめ上げていく重要な機能を果たしていることを、確信するはずである\*41。

(東京大学)

## 主要参考文献

- Bowra, C. M., *Sophoclean Tragedy* (Oxford 1944).  
 Burnet, J. ed., *Platonis Opera*, Tomus III (OCT; Oxford 1903).  
 Burton, R. W. B., *The Chorus in Sophocles' Tragedies* (Oxford 1980).  
 Cairns, D., 'From Solon to Sophocles: Intertextuality and Interpretation in Sophocles' *Antigone*', *JASCA* 2 (2014) 3–30.  
 Collard, C. ed., *Euripides: Supplices*, 2 vols. (Groningen 1975).  
 Diggle, J. ed., *Euripidis Fabulae*, Tomus II (OCT; Oxford 1981).  
 Easterling, P. E., 'The Second Stasimon of *Antigone*', in Dawe, R. D., et al., eds., *Dionysiaca* (Cambridge 1978) 141–158.  
 Garvie, A. F. ed., *Aeschylus: Choephoroi* (Oxford 1986).  
 Griffith, M. ed., *Sophocles: Antigone* (Cambridge 1999).  
 Hutchinson, G. O. ed., *Aeschylus: Seven Against Thebes* (Oxford 1985).  
 Jebb, R. C. ed., *Sophocles: Plays, Antigone* (Cambridge 1900. Repr. London 2004).  
 Kamerbeek, J. C. ed., *The Plays of Sophocles*, Part III: *The Antigone* (Leiden 1978).  
 Kitto, H. D. F., *Form and Meaning in Drama* (London 1956).  
 Kitzinger, M. R., *The Choruses of Sophocles' Antigone and Philoktetes: A Dance of Words* (Leiden and Boston 2008).  
 Lloyd-Jones, H. and Wilson, N. G., *Sophoclea: Studies on the Text of Sophocles* (Oxford 1990).  
 Lloyd-Jones, H. and Wilson, N. G., *Sophocles: Second Thoughts* (Göttingen 1997).  
 Lloyd-Jones, H. and Wilson, N. G. ed., *Sophoclis Fabulae* (OCT; Oxford 1990).  
 Page, D. L. ed., *Aeschyli Septem Quae Supersunt Tragoedias* (OCT; Oxford 1972).  
 Sano, Y., 'The First Stasimon of Sophocles' *Antigone* (332–375): Comparison with Texts of Cultural Progress', *JASCA* 2 (2014) 31–46.  
 Sommerstein, A. H. ed., *Aeschylus: Persians, Seven Against Thebes, Suppliants, Prometheus Bound* (Loeb CL; Cambridge, Massachusetts and London 2008).  
 Steiner, G., *Antigones* (Oxford 1984).  
 West, M. L. ed., *Hesiod: Works and Days* (Oxford 1978).  
 Winnington-Ingram, R. P., *Sophocles: An Interpretation* (Cambridge 1980).

\*41 本稿作成にあたって、有益な助言を下された二名の匿名査読委員の方々に、感謝を申し上げたい。